



2009 年度第 4 回教職員研修会 (2010 年 3 月 24 日開催)

目次

1. 2009 年度第 4 回教職員研修会報告	1 頁
2. 授業通信報告	2 頁
3. 平成 21 年度 F D 活動総括	4 頁
4. オフキャンパス・ミーティング報告	5 頁

## 第 4 回教職員研修会に参加して

国際関係学部  
助教 樋口里華

今回の研修は、参加型・双方向の授業スタイルの事例の紹介と実践であった。以下では、研修に参加した感想を簡単に述べていきたい。

### 授業通信についての報告

4 人の先生方のご報告を聞き、授業改善には手間をかける必要があることを改めて実感した。昨年 10 月 27 日に見学した久留米大学安永悟先生の講義では、授業通信を活用することで学生の修学意欲やスタディスキルを高める工夫がされていた。それを見て「なるほど」と感心したものの、自分の授業でもリアクション・ペーパーの活用によるライティングスキルの向上が見られること、次の授業の冒頭で口頭にてコメントを返していること、そして何よりも授業通信を作成するのは大変そうなことなどから、導入は見送っていた。

しかし、先生方がそれぞれの意図で授業通信を有効に活用されているのを知り、学生を成長させるツールとしての授業通信を配布することの意義は、私が考えていた以上に大きいことがよくわかった。少なくとも 1, 2 年生が受講する講義については、私も導入したいと考えている。

### グループワーク実践

まず、成田秀夫先生（河合文化教育研究所）が大学生のレポート作成のプロセスについて概説された後、レポート作成

に必要な理解力と表現力を鍛えるための教育方法の 1 つとして、グループワーク（ブレインストーミング→KJ 法→ワークシート→発表）の概要が説明された。次に中村博幸先生（京都文教大学）から、教育スタイルの 1 つとしてのグループワークの概説が行われたあと、成田先生をファシリテーターとして、研修参加者によるグループワークが行われた。

テーマは「我が大学を高校の先生に知ってもらおう」。教員 7、職員 1、学生 1 の計 9 グループがそれぞれワークシートの作成まで進め、最後に 3 グループの発表が簡単に行われた。私のグループでは、残念ながら最後まで進められなかったが、全体を見ている限り、グループワークの特徴や流れについては共有できたのではないと思われる。こうした手法を授業で導入する場合には、ファシリテーターとしての観察眼やそれなりのスキルが必要になるため、場数を踏んで勉強しようと思っている。

最後に、私にとって研修の最大の「収穫」は、学生の発表であった。法学部 jurico の新 4 年生を中心としたグループは、本学を「穴場大学」とし、学生生活を通じて成長することができる（「最終的に伸びる」）大学であることを、素晴らしい発表によって実証してみせた。改めて、教育の重要性と責任の重さについて考えさせられる発表であった。

## 授業通信による学生へのフィードバック

国際関係学部  
教授 加藤和英

本学に長年導入されているミニッツペーパーは、毎回の授業で学生がどのように講義を理解し、どのような感想をもったかを知る上で有益である。学生にとっても授業の中で聞きにくい質問をすることができる。授業について口頭では言いにくい意見を教員に伝えることもできる。このような学生の質問や意見に対する教員の返事を、確実に伝える方法はないかと考え、数年前から開始したのが「授業通信」である。

授業通信では、毎回の授業で回収するミニッツペーパーの感想や疑問点などに対する教員のコメントや回答、理解ができていないと思われる事項の補足説明を A4 サイズの用紙 1 枚にまとめ、翌週の授業で配布し、主要点を説明している。

授業通信を通した学生と教員のやり取りは、授業の双方向化のひとつの形態であろう。大教室での討論などの本格的な「双方向授業」には困難を伴うが、ミニッツペーパーに記載された学生の感想や疑問に対して答えることで「フィードバック」できるし、授業への興味・関心を高める一助とすることもできる。

授業通信を活用した学生と教員の双方化を図るために、その作成にあたっては、次の諸点に留意している。

- ①些細な質問・疑問であっても、質問・疑問は必ず答える。
- ②前向きな姿勢や理解を深めたことについては、積極的に評価する。
- ③理解が困難であったなどの感想についても、取り上げて適宜助言する。

授業通信で、学生の声を受け止めれば受け止めるほど、小さな紙片に裏まで使っているいろいろと伝えてくれるようになっている。あたかも携帯電話のメールのような役割を果たしている。授業内容を踏まえた学生の意見もある。このような意見が数件あるだけで、学生の記述を活かして授業のおさらび的な文章を作成することもできる。また、授業理解に悩んでいる学生にも助言や励ましの言葉をかけることができる。

今後ともこのようなフィードバックを通して学生との授業の双方向化を進めていきたい。

## 国際政治学通信について

法学部  
教授 山本啓一

### ■ 授業通信作成の方法

従来から、授業で、学生に「疑問・質問・感想・コメント」をレポート用紙（小）に書いてもらっていた。従来はこれを十分に活用出来ていなかったが、今年度 11 月より、優れた内容や受講生全員と共有したい内容のものを 10 枚ほどピックアップし、学生にを手伝ってもらい、それにコメントを付けて「国際政治学通信」として、毎回学生に配布した。作成には、毎回およそ 1 時間から 2 時間ほどかけた。

### ■ ねらい

授業通信には、まず「先週の授業の概要」を簡単に書き、その上で、授業内容についての学生のコメントに私のコメントをつけた。授業の双方向性を強化することで、知識定着度合いを高めることが最大の狙いである。また、学生の優れたコメントを他の学生に紹介することで、学生の意識の向上を促すことにも期待される。

### ■ 効果について

実際に授業通信を 8 回作成したが、その間、全体的に学生

の質問や感想の質と量が向上したことがはっきりと実感できた。これは学生のライティング・スキルが向上したことを示す。

双方向性に関しては、学生からの質問に対して、授業でつたえきれなかったことについても、詳しく説明することができたほか、授業改善の要望が出された際にすぐに対応できるようになった。

また、私自身、リアクション・ペーパーの優れたコメントを抽出して並べることで、学生のニーズがより深く理解できるようになった。例えば、学生は国際政治学理論には興味を持たないと思いついていたが、やり方によっては、逆に極めて興味を持つことがわかった。なお、全体的にみて定期試験の解答のレベルが向上したことも指摘できる。さらに、授業評価アンケートの数値もかなり向上した。

来年度は、授業通信をもとに学生同士が内容を確認したり、感想をいいあつたりする時間を設けることとしたい。これは座席指定を導入すれば容易に可能である。

## 大人数講義における授業通信

### — 学生と親密な人間関係を形成するひとつの方法 —

法学部

准教授 安藤花恵

大人数講義では、学生が「教員は自分たちひとりひとりのことをちゃんと見てくれている」と感じられない。教員との人間関係が形成されないため、話を聞こうという気が起こりにくく、平気で私話をしたり退室したりとマナーが悪くなる。このような事態から脱却するための1つの方法として、授業通信を使って、大人数講義においても教員と受講生との間に人間的な信頼関係を形成してきた報告者自身の体験を紹介したい。

報告者は、履修者が200名を越える授業（「心理学Ⅰ」「心理学Ⅱ」）を担当している。毎回授業の最後にミニツッパパーで質問・感想・要望などを全員に提出させ、次の授業でいくつかの質問等に答える授業通信を配布するという方法を、春学期開講の「心理学Ⅰ」の途中から開始した。授業通信の中では、授業内容への質問に答えると同時に、雑談のような感想や質問にも答え、授業通信を通して学生と対話するように心がけた。時には回答の中で個人的な経験を伝えたり、文体も口語体で堅苦しくならないよう注意し、報告者自身の

パーソナリティーが反映されるような書き方を工夫した。

その結果、直接会話をしたわけではない学生たちとの間にも、人間関係が形成されていくことが感じられた。学内で学生から挨拶されたり、気軽に話しかけられるという機会が増え、話す内容からは、授業を通じて報告者に対して好意を持ってくれていることが感じられた。信頼していない人間には話さないだろうと考えられるような、重い悩みを打ち明けられることもあった。人間、好きな人の話は聞こうと思うし、迷惑はかけたくないと思うものである。そのためか、私語なども減り、迷惑行為は注意すれば素直に態度を改めるようになってきた。その結果、授業通信を開始する前（春学期「心理学Ⅰ」の中間アンケート）に比べ、開始後（秋学期「心理学Ⅱ」のアンケート）は学生からの評価が上がった。

大人数の講義で授業環境が悪くなってしまふ原因のひとつは、学生と教員との間で人間関係を形成できないことであり、授業通信はその状況を打開するのに大いに役立つと報告者は考えている。

## 「授業通信」によって自分の思い込みを修正する

経済学部

教授 島浦一博

授業通信を半年間発行してみて、いろいろなことに気づかされた。ここでは二つのことについて述べてみたい。

一つは授業計画に関わることである。半期で30回の授業を行う外国語科目を担当している私は、試行錯誤を繰り返しながら授業を進めているが、いまだに満足できる授業にたどりつけていない。どうしても途中で、教える側と学ぶ側との間にある種のギャップが生まれてしまい、授業が重くなってしまふ。これまではある程度のギャップはやむをえないと考えていたが、授業通信の発行を重ねていくにつれ、そのギャップは、予想していたよりも大きいということが明らかになった。具体的に言うと、1コマで済むと考えていた授業内容を学生がきちんと理解するには、3コマの授業が必要だった。教える側が持っているイメージをわかりやすく正確に伝えているつもりでも、実際はそうになっていないのである。授業通信は、私たちが日頃漠然と感じているものを、時にくつき

りと浮かび上がらせてくれる。わかりやすい正確な授業を実践するという事は、思っている以上に難しい。

もう一つは学生の好奇心に関わることである。外国語にあまり関心がなく、なんとなく授業に出ているように見える学生でも、授業通信を読むと、外国の人たちの生活習慣や文化について自分なりの見解を持っていて、感心させられることがある。学生はこちらが思っている以上に好奇心旺盛である。授業ではあまり目立たない知的な好奇心も、授業通信という場を設定してあげると、のびのびと活動する。その意味では、授業通信はない学生の知的な好奇心を刺激するツールとなる可能性を秘めている。

今後とも授業通信を最大限に活用して、学生一人ひとりの知的な好奇心を育むとともに、わかりやすい授業の実践を心がけたいと考えている。

## FD活動の発展・応用を目指して

### －平成 21 年度 FD 活動を振り返って－

FD 委員会委員長代行  
副学長 加藤和英

平成 20 年 1 月にファカルティ・ディベロップメント委員会を設置して以来、本格的な FD 活動が 2 年目となった平成 21 年度は、平成 20 年度の 1 年目が「導入」期とすれば、早くも「発展・応用」への移行期に入ったといえよう。教職員研修会等の活動状況にみる通り、FD 活動を外部講師に依存する形から本学教員も講師を務める主体的な教職員研修会を実施する体制が整ったといえる。その形態もワークショップ型の研修会を企画するまでに至っている。

授業アンケートに対する教員コメント、授業科目の個人教育報告書、学部教育の学部教育報告書の作成を通じた授業改善への取り組みは、文部科学省の平成 21 年度大学教育・学生支援推進事業への申請に対する評価結果において特に優れた点として評価された。

FD 委員会の下に、教務部長と学部の FD 委員ならびに学務事務室職員のワーキング・グループが設置され、制度上の改善についても検討が行われた。平成 22 年度以降の授業評価アンケートについて設問項目、自由記入欄の改善、対象科目、活用方法について新たな制度を策定した。特に、アンケート結果の学生へのフィードバックについても分野ごとの数値教職員研修会等（学部・研究科単位の活動は含まない）

と教員コメントを公表することとした。また、授業評価アンケートの結果に基づく授業科目ごとの個別対応についても制度が整備された。多様な学生が入学するようになっているなかで、これらの学生の声にこれまで以上に「謙虚に」耳を傾け、答えていくことが大学の活性化を図る上で不可欠である。各授業科目の授業改善そのものは個々の教員各位の努力が基本であるが、教育改善に向けた制度がさらに整備されたことは一定の評価が与えられよう。また同ワーキング・グループでは、新たな改善・改革の取り組みとして、授業環境改善（学部での講義ルール策定、大人数クラスの座席指定、職員による支援など）や SA（スチューデント・アシスタント）の導入が検討され、新年度より順次具体化していくこととなった。

今後とも、このような取り組みを発展させるとともに、初年次教育プロジェクトや教務委員会とも連携を図りつつ、FD 活動の質的向上を図り、大学設置基準等に定められた「授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究」（第 25 条の 3）に努めて参りたい。

第 1 回	平成 21 年 6 月 17 日	初年次教育シンポジウム「学生のモチベーションに火をつけるために」 講演：「学生観と動機付け：仲間と学びあう喜び」（久留米大学文学部 安永悟教授） 報告：「夢と現実のギャップと勉学に対するモチベーション」（経済学部 三島重顕准教授）、「憩いの場としての入門演習」（法学部 高木康衣准教授）、「グループワークと通じたゼミでの参加型学習」（国際関係学部 藤井大輔助教）、「Project Adventure 研修の成果」（法学部 山本啓一教授）（90 名参加：教員 55 名、職員 35 名）
第 2 回	9 月 26 日	学部の取り組み 報告：「大学教職員に情報共有による発展を目指して、初年次法学教育での取り組み」（法学部 徳永達哉准教授）、「経済学部における寄附講座の取り組み」（経済学部 宮崎昭教授）、「入門セミナーにおける初年次教育の取り組みについて」（国際関係学部 高橋和幸教授）（37 名参加：教員 32 名、職員 5 名）
第 3 回	11 月 25 日	初年次教育シンポジウム「学生のモチベーションに火をつけるために」 講演：「学びへの意欲を育てる教育」（上智大学総合人間学部 奈須正裕教授） 報告：「ホテルマンと浮浪者」（経済学部 中里彰教授）、「運命共同体としてのゼミと教師の役割」（経済学部 陳韻如准教授）（55 名参加：教員 42 名、職員 13 名）
	平成 22 年 2 月 12, 13 日	初年次教育オフキャンパス・ミーティング （法学部 4 名、経済学部 3 名、国際関係学部 3 名、職員 2 名参加）
	3 月 8, 9 日	FM（フレッシュャーズ・ミーティング）事前研修（学生 27 名、教職員 23 名参加）（山口県徳地青少年自然の家）
第 4 回	3 月 24 日	報告：授業通信（法学部：山本啓一教授、安藤花恵准教授、経済学部：島浦一博教授、国際関係学部：加藤和英教授）、ワークショップ「学生のリテラシーを向上させるグループワークとは」（京都文教大学 中村博幸教授、河合文化教育研究所 成田秀夫氏）（47 名参加：教員 38 名、職員 5 名、学生：4 名）

## ワークショップ研修と次年度計画の立案へ

－初年次教育プロジェクト「オフキャンパス・ミーティング」に参加して－

学務事務室  
片山 浩己

2010年2月12日（金）、13日（土）の両日、宗像市のグローバルアリーナにて開催された初年次教育プロジェクト主催のオフキャンパス・ミーティングに参加しました。参加者（敬称略）は、法学部：山本啓一、古屋邦彦、櫻井弘晃、安藤花恵、経済学部：西堀喜久夫（12日のみ）、中間信博、安藤友張、国際関係学部：人見五郎、樋口里華、藤井大輔、職員：栗原大介、片山浩己の計12名でした。

### オフキャンパス・ミーティング スケジュール

2月12日（金）

14:30～16:00 ワークショップ1 グループワーク体験  
16:30～18:00 ワークショップ2「初年次教育とは何か？」  
19:30～20:30 PAアクティビティ体験会  
20:30～ 懇親会

2月13日（土）

9:30～11:30 ワークショップ3「来年度の初年次教育の計画」  
13:00～13:30 初年次教育関係研修会報告  
13:30～16:00 ディスカッション『初年次教育の「目標」、「方法」、「提言」』

オフキャンパス・ミーティングとは、学内を離れることによって、参加者の凝集性を高め、長時間にわたる集中的な議論が可能となり、その結果、新規性と実効性の高い計画立案が期待される手法です。この手法自体、今年度の初年次教育学会において提唱されたものです。今回のオフキャンパス・ミーティングでは、初年次教育プロジェクトの今年度の活動成果の総括と来年度の計画立案を行うだけでなく、初年次教育において活用されるグループワーク等の手法を学ぶワークショップを実施しました。初年次教育プロジェクトメンバー以外が参加することにより、初年次教育の趣旨やノウハウを、学内に広げていく機会となることも期待されます。

最初のワークショップとして、山本法学部長がファシリテーターとなり、「ジグソー学習法」によるグループワークに挑戦しました。この「ジグソー学習法」とは、協同学習を目的として、アメリカの社会心理学者であるエリオット・アロンソンらによって開発されたものです。一般的には、1)学習を小集団に分ける、2)教材を分担可能にする、3)教材を一人ひとりに分担する、4)カウンターパート・グループをつくる、

5)もとの小集団で教えあうようにするという手順で進めていきます。この学習法では、一人一人の役割が明確であると同時に、一人一人が欠くことのできない重要な存在となってきます。つまり、グループの構成員全員の働きがあってこそ、初めて課題解決を成し遂げられるのがこの学習法のポイントです。今回はまずファシリテーターからジグソー学習法についての説明を行いました。その後、5人のグループに分けてチーム名を決め、日本航空の破たんに関する5件の新聞記事を配付し、1)各人が1つの新聞記事を読んで内容を要約する、2)要約した内容をグループ内のメンバーに説明する、3)全員の内容を要約し模造紙に記入する（ポスターを作る）、4)そのポスターを基に各グループの代表者が発表する、5)他のグループがその内容について質問する、6)ファシリテーターが発表内容を含め全体を講評するという手順で進めていきました。2つのグループの発表内容は、同じ新聞記事を読んで作成したにもかかわらず、全く異った角度からなされており、とても興味深い結果となりました。

続いて、藤井国際関係学部助教がファシリテーターとなり、「初年次教育とは何か？」というテーマで、グループワークによるワークショップを行いました。まずファシリテーターからワークショップの進め方（ブレインストーミング法やKJ法など）について説明があり、1)初年次教育について思いついた項目（何でもよいとのこと）を各人が付箋紙に記入する、2)先程作ったグループ内のメンバーに付箋紙に記入した項目の内容について説明する、3)同じ内容や関係ある内容の付箋紙を固めてタイトルを付け模造紙に張る、4)それを基に各グループの代表者が発表する、5)他のグループがその内容について質問する、6)ファシリテーターが発表内容を含め全体を講評するという手順で進めて行きました。今回も2グループとも同じテーマだったのですが、グループの構成員が教員・職員の混成で、教員の中でも初年次教育に主体的に携わっている者とそうでない者がいるため、各人の意見は多岐に渡っており、グループ間で纏め方、発表の内容や方法がかなり異っていました。

夕食後、人見国際関係学部教授がファシリテーターとなり、PAアクティビティ体験会を行いました。PA（プロジェクトアドベンチャー）は冒険教育ともいわれ、心理学や体験学習の手法を取り入れた、参加者の自主性や協調性を養う野外活動を中心としたプログラムです。最近では企業研修や学校教育にも導入されてきており、本学のフレッシュャーズ・ミーティングなどでも既に取り入れられています。本格的に行う場合は、野外施設が整った場所（国立山口徳地青少年自然の家など）が必要となりますが、今回は野外施設を使わなくてもできるアクティビティの中からいくつかを選び、全員で体験してみました。最初はちょっと恥ずかしいと思いながらやっていたのですが、色々なアクティビティを体験していくうちに段々真剣に取り組むようになり、気が付いた時には一時間弱経過していました。

その後の懇親会では、今回のテーマである初年次教育の内容から各学部の情報交換まで、深夜まで議論が続き、教員、職員という立場を超えて率直な意見交換ができました。

2日目の午前中は、昨日に引き続き、藤井国際関係学部助教がファシリテーターとなり、「来年度の初年次教育の計画」というテーマで、グループワークによるワークショップを行いました。ワークショップの進め方は昨日と同様ですが、グループのメンバーを一部入れ替え、各人が記入した付箋紙を来年度の計画として模造紙に纏める際、縦軸に「個人・組織でやること」、横軸に「費用の有無」として四分分割し、それぞれの場所で3つのグループに纏め、それぞれにタイトルを付けて、それを基に発表するスタイルを取りました。各グループの発表内容は共通した項目もありましたが、半分以上は異なる項目で、グループ毎での考え方の違いが良く分かりました。

午後は、今回の参加者への情報提供として初年次教育関係の研修会等の報告が行われ、9月に関西国際大学で開催された『初年次教育学会』、10月の久留米大学安永教授の『授業参観』及び1月の河合塾主催の『学生を変容させる初年次教育シンポジウム』の参加者から提出された報告書を基に、概要報告が行われました。

最後に、全員で来年度以降の初年次教育の「目標」、「方法」、「提言」を纏めることとなりました。まず今までのワークショップで出された意見から、「目標」、「方法」、「提言」の中に入れ

られる内容を選択（以前のワークショップで使った模造紙に貼っていた付箋紙を使用）して、線を引いて3つの項目に区分できるようにしたホワイトボードに貼り付けました（一部は新しい内容を追加）。そこから同じ内容や類似した内容をグルーピングして、それぞれのグループの関連付けを分かるように紐付けしていきましたが、活発な意見が相次ぎ、予想以上に時間を費やしてしまい、終了予定時刻の3時を大幅に回ってしまいました。最終的には初年次教育プロジェクトで今後この内容を引き続き検討することとし、付箋紙を貼り付けたホワイトボードの暫定案を今回のオフキャンパス・ミーティングの纏めとして、4時に終了しました。

今回のオフキャンパス・ミーティングの研修会場は大学からさほど離れていない場所でしたが、忙しい日常の業務から開放されたので、2日間とも初年次教育を考えることに没頭できました。また今回のように3学部の教員と職員という構成で合宿研修を行ったことがなかったこともあり、新鮮さを感じるとともに、コミュニケーションの場を得ることができたことも良かったと思います。本学のような小規模の大学ではこのような学部を超えた様々な取組が必要であり、今後も今回と違ったメンバーで継続していくことが重要であると考えます。参加者全員が最後まで真剣に取り組んでいる姿がとても印象的でした。



---

発行：2010年3月31日

九州国際大学 FD委員会

〒805-8512 北九州市八幡東区平野1丁目6番1号

TEL093-671-9010 Fax093-662-8340

<http://www.kiu.ac.jp>

編集：大学事務局 学務事務室

---